

2020/08/02

ヨハネの福音書 講解メッセージ⑨

『伝道の様子』 ヨハネ 4:1-26

「イエスがヨハネよりも弟子を多くつくって、バプテスマを授けていることがパリサイ人の耳に入った。それを主が知られたとき、——イエスご自身はバプテスマを授けておられたのではなく、弟子たちであったが——主はユダヤを去って、またガリラヤへ行かれた。しかし、サマリヤを通って行かなければならなかった。」

(ヨハネ 4:1-4)

イエス様が多くの弟子を作ってバプテスマを授けていることがパリサイ人に知られたため、イエス様はユダヤを去ってガリラヤに行くことにしました。神は争いを避ける方であることがわかります。

また、この時、イエス様はサマリヤを通らなければなりませんでした。このサマリヤで神の栄光を表す大きな出来事が起こります。神はそれぞれに深い計画を持ち、すべてを益とし、どんなことを通してでも私たちを導いてくださるのです。

ですから私たちは、すべてのことに感謝しましょう。「なぜこんなことが起きたのだろう」とつぶやくのではなく、「このことを通してあなたの栄光を表してください」「益としてください」と祈るなら、新しい道が開かれます。

■ 「わたしに水を飲ませてください」

「それで主は、ヤコブがその子ヨセフに与えた地所に近いスカルというサマリヤの町に来られた。そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れで、井戸のかたわらに腰をおろしておられた。時は第六時ごろであった。ひとりのサマリヤの女が水をくみに来た。イエスは「わたしに水を飲ませてください」と言われた。弟子たちは食物を買いに、町へ出かけていた。そこで、そのサマリヤの女は言った。「あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリヤの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。」——ユダヤ人はサマリヤ人とつきあいをしなかったからである——」(ヨハネ 4:5-9)

イエス様はサマリヤで一人の女性に声をかけます。伝道は、私たちのほうから声をかけるところから始まります。勇気のいることですが、祈って声をかけてみましょう。また、イエス様は、当時ユダヤ人がつきあいをしなかったサマリヤ人に声をかけておられます。私たちも、伝道する相手を分け隔てせず、機会があれば誰に対してでも福音を伝えていきましょう。

さて、この時声をかけられたこの女性は、イエス様が誰だか知らず、ただ見ず知らずの人に水を汲むように頼まれたこととなります。ここから、私たちが人に対してすることは、神

に対してすることと同じだという原則を学ぶことができます。イエス様ご自身が、『あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。』（マタイ 25:40）と言っておられます。すべての人のいのちの土台は神のいのちで造られていますから、ひとりひとりが神の一部です。この意識が持てるようになると、人をさばいたり差別したりすることがなくなります。

「イエスは答えて言われた。「もしあなたが神の賜物を知り、また、あなたに水を飲ませてくれと言う者がだれであるかを知っていたなら、あなたのほうでその人に求めたことでしょう。そしてその人はあなたに生ける水を与えたことでしょう。」

（ヨハネ 4:10）

この女性は、この方が神だということを知りません。この女性に限らず、人はどんなに頑張っても、自分の知恵で神を知ることはできません。

人間の抱えている最大の問題点は、自分から神を知ることができないことです。「神を知らない」ということが「死」です。「死」とは朽ち果てることであり、有限性とも言います。人は神のいのちをいただいているので、本来は永遠で、神を知っており、自由を知っています。ところが、悪魔にだまされて有限性になり、永遠も自由も失って、いずれ滅ぶものとなり、制約された世界に生きるようになりました。誰もが死にたくないという思いを抱いたり、何かに反抗したりするのは、本来永遠や自由を知っていたからです。しかし、人は有限性になったために、永遠性を理解することができなくなり、神を理解することができなくなってしまいました。

今、人が自由を味わうことができるのは、空想の世界の中だけです。この世界には、私たちが本来知っていた永遠や自由はありません。そのため、人は皆どうしようもない不安を抱えています。この不安が見える安心をむさぼらせ、人は罪を犯すのです。

■ 生ける水

生ける水とは永遠のいのちです。わたしたちは生まれたままの状態では、永遠のいのちを持っていません。イエス・キリストを信じることで、永遠のいのちが与えられます。それは、イエス様が、私たちのやがて朽ち果てる肉のからだに、霊のからだを着せてくださったということです。

「彼女は言った。「先生。あなたはくむ物を持っておいでにならず、この井戸は深いのです。その生ける水をどこから手にお入れになるのですか。あなたは、私たちの父ヤコブよりも偉いのでしょうか。ヤコブは私たちにこの井戸を与え、彼自身も、彼の子たちも家畜も、この井戸から飲んだのです。」」（ヨハネ 4:11-12）

イエス様は霊的な話をしたのですが、このサマリヤの女性は、すべて有限性の世界の話に

置き換えて聞いたため、まったく理解できませんでした。「この方は見たこと、また聞いたことをあかしされるが、だれもそのあかしを受け入れない。」(ヨハネ 3:32)とありますが、神様はちゃんと私たちに伝えてくださるのですが、人間には理解できないのです。

理解できないことは、信じるしかありません。だから、神を知るとは、理性や勉強の対象ではなく、信仰です。それを、信じられないようにさせるのが理性です。常に自分の思いを優先させ、納得したものを信じようとするから、信仰が成長しないのです。神のことばは神の国で通じることばであり、この地上に生きる私たちにはそもそも理解できないものです。だから、信じるしかないのです。

問題はなかなかそれができないことです。

■ 渴くことがない

「イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでも、また渴きます。しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」

(ヨハネ 4:13-14)

イエス様は、これと全く同じことを次のように説明しています。

「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」(ヨハネ 10:28)

「永遠のいのちをいただく」とは、救われるということです。一度救われたらその救いが取り消されることはない、とイエス様は言っておられますが、多くのクリスチャンが、救われた後の歩みが良くないと天国に行けないのではないかと不安に思っています。救われたときは信仰で救われたと信じていたのですが、救われた後、なぜか律法によって救いを完成しようとする誤りに陥ってしまうのです。

なぜこのような誤解が生まれるのでしょうか。それは、罪を誤解しているからです。

多くの方が、罪を行いの規定でとらえ、罪を犯すと、自分が悪いからだと考え、不安になって、天国に行けないのではないかと心配します。

しかし聖書は、罪は病気だと教えています。あなたの病気をいやすために入院させた医者が、病気が悪化したからといって、病院を追い出すようなことをするのでしょうか。救いとは、イエス様の病院に入院したようなものであり、イエス様はどんなことがあってもあなたを追い出すことはありません。十字架の血潮はあなたをいやすためです。

ですから、救われた人が滅びることは決してありません。自分の状態を見て、救われてないのではないかと不安がるのはもったいないことです。

■ 永遠のいのちへの水が湧き出る

イエス様は、「わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」と言われました。永遠のいのちが与えられて、泉となり、永遠のいのちに向かうとは、どういうことでしょうか。これがわかるとクリスチャン生活とは何かがわかるようになります。

「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。」

(ヨハネ 10:10)

「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」(ヨハネ 17:3)

永遠のいのちとは、イエス・キリストを知ることであり、イエス・キリストご自身を指すことばでもあります。

救いとは神の呼びかけに応答することです。救われたら、その人は永遠のいのちを手にし、魂に霊の体が着せられるので、神の国を知ることができるようになります。そして、イエス・キリストを信じることができるようになり、その時初めて自分がクリスチャンになったと自覚できるのです。救いを自覚することによって、意識の上でもイエス・キリストを知ることになったので、交わることができるようになります。その交わりを深めて信頼を増し加えていくことが、永遠のいのちを豊かにすることです。

「罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」(ローマ 6:23)

「しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。」(ローマ 6:22)

イエス・キリストという永遠のいのちを賜物としていただいた人は滅びることがありません。神に捕らえられて神のものとなったからです。救いとは、罪がいやされる治療に入ることです。その行き着くところは永遠のいのちです。罪がいやされればいやされるほど、神への信頼が増し、友の関係になります。

これがわからないとクリスチャンとして生き方がわからなくなってしまいます。一度救いを自覚すると、イエス様と交わりをしないと、喜びを感じて満足できないという事態が起こるのです。何をやっても、楽しいけれど、あとからむなしさを感じてしまうのです。クリスチャンになる前は、そんなことはありませんでした。それで、なんとか他のもので満たせないかとチャレンジする人が大勢います。そのようなことのむなしさに気づくことができれば幸いです。

聖書の中に、この世の楽しみを追求して、壮大な実験をした人がいます。ソロモンです。彼は 1000 人の妻を持ち、計り知れない富と財宝を持ち、贅沢の限りを尽くして暮らしました。その結果、「空の空。すべてはむなし。だから、神を覚えて神を信じよ。」という結論に達

しました。

私たちの魂は神を慕い求めています。肉を喜ばせても、肝心の魂が満たされることはないのです、むなしだけです。クリスチャンになって困ることは、魂のむなしさが倍加することです。以前は永遠のいのちに向かっていないため、適当にごまかせたのに、クリスチャンになってからは、どんなに肉を楽しませてもむなしさを感じてしまうのです。

クリスチャンが目指すべきは、神への信頼を増し加え、キリストと共に生き、慰めを受けとることです。この方向を間違えると、何をやってもむなしばかりです。たとえ間違えても救いが取り消されることはありませんが、むなしさは消えません。

■ イエス様の伝道アプローチ

「女はイエスに言った。「先生。私が渴くことがなく、もうここまでくみに来なくてもよいように、その水を私に下さい。」イエスは彼女に言われた。「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい。」女は答えて言った。「私には夫はありません。」イエスは言われた。「私には夫がないというのは、もっともです。あなたには夫が五人あったが、今あなたといっしょにいるのは、あなたの夫ではないからです。あなたが言ったことはほんとうです。」女は言った。「先生。あなたは預言者だと思います。私たちの父祖たちはこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムだと言われます。」(ヨハネ 4:15-20)

イエス様が、突然「あなたの夫を呼んで来なさい」と言われたのは、理屈ではなく彼女が福音を信じられるようになるためです。人は、本当に自分の罪がわかり、どうすることもできないと思った時、神に助けを求めるようになります。その時、それまで信仰を邪魔してきた理性は下に押しやられて、信仰が働くようになるのです。こうして、神の恵みを受け取ることができるようになります。

彼女は、当時最も重罪であった姦淫を犯していました。その罪をあばかれ、彼女は神の前にへりくだりました。そして、これまで自分が聞かされてきたことに疑問を持ち、不安を覚えた彼女はイエス様に質問をしました。

「イエスは彼女に言われた。「わたしの言うことを信じなさい。あなたがたが父を礼拝するのは、この山でもなく、エルサレムでもない、そういう時が来ます。救いはユダヤ人から出るので、わたしたちは知って礼拝していますが、あなたがたは知らないで礼拝しています。しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」(ヨハネ 4:21-24)

イエス様は、彼女の罪を暴きましたが「悔い改めなさい」とは言いませんでした。ここで彼女の信仰が生まれました。

多くの人が誤解し、多くの聖書が誤訳していることですが、神は一度たりとも「罪を悔い改めよ」と言ったことはありません。イエス様は、罪は病気だとわかっていますからさばいたりしません。イエス様が語っておられるのはただ「福音を信じなさい」ということです。「あなたの重い荷を持って私のところに来なさい。休ませてあげるから。」と主は言われました。伝道は、人を責めてはいけません。神は赦す方です。信じるだけでいいのだということここから学ぶことができます。

その後は、救われた人が神を知るようになる様子が語られています。サマリヤ人であるこの女性は神の名を知りませんでした。神を知らない人が、潜在意識の中で神に応答して救われても、誰が神かわかりません。だから、私たちは神の御名を宣べ伝えて伝道する必要があるのです。

「女はイエスに言った。「私は、キリストと呼ばれるメシヤの来られることを知っています。その方が来られるときには、いっさいのことを私たちに知らせてくださるでしょう。」イエスは言われた。「あなたと話しているこのわたしがそれです。」

(ヨハネ 4:25-26)

この時、彼女は「この方を信じるのが救いなのだ」と、救いを自覚し、これが命の水を飲むことだと理解しました。この後、彼女は救いを町の人に伝えに行くのです。彼女は、罪を暴かれて責められることなく、「信じなさい」と言われた時、イエスがキリストだと知りました。

伝道とは収穫です。神が救った人を私たちが刈り取ることです。神を知らずに救われている人たちが、救いを自覚できるように促すこと、それが伝道です。イエス様は次のように言われました。

「あなたがたは、『刈り入れ時が来るまでに、まだ四か月ある』と言ってはいませんか。さあ、わたしの言うことを聞きなさい。目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。」(ヨハネ 4:35)